



講演「近代美術と謄写版 - 黎明から次の黎明へ -」

講師：植野比佐見（和歌山県立近代美術館主任学芸員）

※この文章は2019年11月16日に講演されたものを文字起こししたものになります。
掲載画像は一部を除き全て和歌山県立近代美術館出典です。この資料の第三者による再配布は禁止です。

はじめまして。和歌山県立近代美術館の主任学芸員の植野比佐見と申します。今日はこうやって神崎さんのアトリエ開きにご一緒させていただいて嬉しく思っています。

和歌山という場所でどうして謄写版を研究するようになったかを、まずご紹介したいと思います。はじめは、2006年に和歌山市内で謄写版の印刷工房を運営しながら作家活動をしていた清水武次郎の遺作が、まとめて収蔵されたことでした。当時、私たちは清水の活動については、こういう方がいて和歌山市でグループ活動も行っていたということしか知りませんでした。

そこから調査を始めました。作品を実際に手にして、これはどのように作るのか。実際に自分で道具を集めて材料を集め、神崎さんと同じように原紙を作ったりしながら調べていきましたら、これは大変に面白いということがわかりました。その技法、独特の効果、その歴史といった事実を発掘するひとつの泉であるということに気がついたわけです。それぞれの作品、あるいは作家について、そしてそれらを美術史の中に位置づけるため、今まで企画展を何度か開き、さまざまな研究会や学会などで発表しています。

謄写版についての執筆もしております。現在『版画家名覧』という日本の版画家の事典を作っているところで、そこに謄写版で版画を作っていた人を含めています。ただ、戦前のことに絞っていますので、残念ながら戦後、謄写版が版画技法の一つとして脚光を浴びていた時期のことはあまり

載りません。それは改めて展覧会などで発表していきたいと思っております。

このように当館で開催された謄写版の展覧会を挙げてみましたが、普段のコレクション展でも、謄写版画が出品されています。手前の作が彦根で謄写版工房を運営しながら自身も版画を作っていた方、岩根豊秀の仕事。それから奥に見えますのが、戦前から謄写版で創作版画を制作していた若山八十氏<わかやまやそうじ>が、周囲の若い人たちと謄写版の新しい版画としてのあり方を研究していた「蝸土会<しゅうどかい>」の作品です。作品の大きさを定め、月に一度の研究会で互いに交換していました。

これは先ほど申しました清水武次郎の作品です。この当時、1960年代は、謄写版の黄金期だったと言われている時期で、新しい素材などもさかんに開発されていました。作家も業者が開発する新しい素材を進んで受け入れ、創造的な表現に生かしていました。清水もそのひとりでした。若山八十氏の勧めで日本版画協会、国画会に出品し、自分の居場所を作っていたわけです。

その清水の創作のはじめはこのような作品でした。これが、当館の最初の清水の作品の一つであり、最初の謄写版画のコレクションでもあるのです。もと恩地孝四郎<おんちこうしろう>のコレクションにありました。恩地は「一木会<いちもくかい>」とあって、毎月第1木曜日を版画研究の日とし、若い作家たちと勉強会をしていて、若山もそこに参加していました。若山八十氏経由で恩地の手元に渡った作品ではないかなと思う

のですけれど、もとはこのような、和歌山の「新しき村」の機関誌や、彼が自分で出していた謄写版の技術誌『とうしゃ文化』にもあるイメージです。

清水が謄写版と出会ったのは戦前のことです。これは清水の作品の中でも一番古いのではないかと思います。昭和13年、この頃

Meets TO-SHA



和歌山県立近代美術館 最初の謄写版画コレクション

清水は師範学校を出て小学校で教えていました。そこで先輩の先生、奥山勇<おくやまいさむ>という絵画製版が上手な人に技術を学びました。そして、戦後まもなく奥山と清水と一緒に「蝸牛工房<かぎゅうこうぼう>」という工房を立ち上げます。その前に、この宝船の絵がありますね。この、奥山と清水と一緒に仕事をした「和歌山美術謄写会」という会のダイレクトメールです。絵の部分、これはおそらく奥山の仕事、隣のでんでん虫のかわいらしい図柄の作品が、清水が自宅で開いた、「蝸牛工房」の挨拶状、ダイレクトメールです。絵の左下にTakeとサインも入っています。この頃には、清水は謄写版というものを自分の表現のための「手段」としています。その清水が最初に蝸牛工房で刊行したものは、『創作かっとう案集』でした。

謄写版を手がけた方はご存知だと思いますが、謄写版は口ウ原紙に文字と図柄と一緒に製版できる版式です。刷り物の文字の空

Meets TO-SHA



いたところに、なにか楽しい図案を入れたいという需要があり、多くの謄写版の技術者がこのような図案集を作っています。今でも古書店などでご覧になることがあるかと思います。

改めて申し上げるまでもなく、孔版は穴からインクを出す、つまりふさがっているところはゼロ、穴が空いていたところは1でとてもデジタルな感じですが、実際に製版し印刷する方法としては、極めてアナログです。

電気も要らない。広い工場もいらぬ。大きな機械もいらぬ。今神崎さんがここに展示されている、このヤスリがあつて原紙があつて鉄筆があればできます。印刷器がなくても、今だったら市販のシルクスクリーン用の布を張った枠でもできる。もっと言えば厚紙に窓を開けてそこに原紙をそのまま貼り付けて刷ってしまう。そういうこともできます。

これが、なくては始まらない原紙です。今、手に入りづらくなっていると言いますが、例えば地方にご旅行なされたとき、ちょっと大きな昔から商売をされている文房具屋さんにお尋ねになってみてください。案外残ってます。私はそうやって資材を集めて、30人くらいのワークショップをやっております。やろうと思えば誰でもできる。まだできるはず。たぶん今がターニングポイントだと思います。これが何かを分かっている人がいなくなったら材料もどんどん消えていくかもしれない。

日本の謄写版は1894年堀井謄写堂が開発して発売しました。これがその当時のパンフレット、取扱説明書ですが、仕組み



は今とほとんど変わらない。まだこの段階ではシルクスクリーンを張っていないくらいが違いでしょうか。当時の堀井の印刷見本として作られたのはこのようなものです。字だけでなく絵も製版できると紹介していますが、絵は簡単な線描にとどまっています。けれども、同時期、戦争で俘虜<ふりょ>になったドイツ兵が収容されていた徳島の板東俘虜収容所では、このような多色印刷を実現しています。堀井の印刷器によるものです。

謄写版には、日本に来て初めて触った人もいたかもしれません。しかし、彼らの中に石版などの印刷について詳しい人がいたに違いないと思います。鳴門のドイツ館へ行かれたら、彼らの制作物をたくさんご覧になることができます。収容所の中で通用する切手やお札なども作っています。彼らが作ったものがあまりに見事です。どうやって作ったのか、と思いますが、それを研究して実際に再現しているのが坂本秀童子<さかもとしゅうどうじ>さんです。

一般の人にとって謄写版が身近になったのは、堀井の特許

「大衆の娯楽は自ら大正七年に独自の青年向け娯楽が
る志願に燃まっていた。そして謄写版を大衆化したと云ふ。
更にまた、巻頭の山下さんが謄写版入りの娯楽は、
ドイツ人の精巧なる謄写版であったと云ふ。」
中村博「謄写版美術誌」『謄写版』1-6
【1935（昭和10）年12月10日】

板東仔戯取容所 1917-19（大正6-8）



山形謄写印刷所

関東での謄写版の普及 謄写印刷店のショーウィンドー 佐藤兄弟商会1931年カタログより



個人蔵

が切れてからです。特許が切れると、簡単な仕組みの器械なので、だれにでも作ることができるようになりました。ここでまずご紹介するのは、関西での謄写版の普及です。大正3年に、新世界という大阪の繁華街で、三光堂<さんこうどう>が店開きしたのが始まりだそうです。三光堂ではショーウィンドウを設けており、その中に美しい印刷見本を紹介していました。

同じことは東京でも行われており、これは佐藤兄弟商会<さとうけいていしょうかい>の店先の図です。ガラス窓の中に謄写版の印刷機、インクなどの道具と一緒に、後ろの方に見本がたくさん掲示されています。この図は佐藤兄弟紹介の事業案内に載っているものですが、その案内自体が素晴らしい印刷物です。おそらく佐川義高が手がけたのではないかと思います。販売店は機械を売るだけじゃなくて技法を紹介し研究していったわけですね。

これは昭和堂月報の戦前の分とそれから戦後の分。こんなに続いた販売促進のためのニューズペーパーはないんじゃないかと思えます。このように業者も努力しますが、学校も創設されました。「日本謄写芸術院」東京にできた学校です。このように新聞がありまして、部数が多かったためか活版ですが、勉強の

「昭和堂月報」創刊号 昭和8年9月



ための見本として作られたものは謄写版によるものです。

ここに集まった人たちが、日本謄写芸術院で教えました。謄写版の歴史の中で、主だった方はみなさん参加しています。有

日本謄写芸術院 1930（昭和5）創立

『謄写研究』、技術書を発行
作品審査会、講習会の開催



日本謄写芸術院蔵
『謄写研究』

『謄写研究』付録
『各州謄写印刷機』
『各州謄写印刷機』

村博もそれから芥川清巳も。そして佐川義高、後の草間京平がいます。この写真は講習会の記念撮影で、後ろの方に参加した生徒たちが写っています。

佐川義高という人がどのような仕事をしたのかを少しご覧ください。左側が昭和謄写堂、今はショーウという印刷会社に発展した店が作った曆です。

彼の代表作の一つです。右が元の絵なので、これは複製じゃないか。複製ということと創造性をどうつなげて考えたらいいのか。と思われるかもしれませんが、もとの絵である鳥居清長<とりいきよなが>の浮世絵を謄写版に置き換えるときに、もとは藤の花が咲いている初夏の眺めを、雪が舞っている冬の情景にしてしまっています。描かれた女の人の仕草や表情も、冬めいて見えます。心の通った仕事をしている一つの例ではないかと思うのです。

ちょっとわかりにくいのですが、これは油絵を謄写版で製版したものです。草間京平はとりわけ謄写版による再現技術に優れて



草間京平
「昭和謄写堂
1953年度カレンダー」

参考：鳥居清長 桂繪

いました。色彩のある図柄を作るためにこのようにして版を重ねていく見本です。講習会のために作ったものです。この赤もじゃもじゃとした版、これはこの図柄を再現するため、色と色の境目の輪郭をとった「アタリ」です。それでそれぞれの版に「アタリ」を印刷し、製版してこのように重ねていけば一番右下にあるような多色刷りの図柄ができます。

先ほど記念写真にもいた芥川はゴシック体、謄写版の特徴に合った、読みやすい字体を作った人です。実際に、この人の製



版は見事で読みやすいものです。関西で同じように字体を作っていた人が小泉與吉<こいずみよきち>です。彼のゴシック体は、小さなセルロイドの定規を使って製版していく、パイロット製版と名付けられたものです。

小泉はまた、版画を作る人でもありました。小泉與吉のこの『謄写版』の表紙は、原画は画家が描いた水墨画です。しかし、その画家自身が、小泉の版画はもともとの作品よりもっと魅力的になり、複製ではなく創作だとしています。

その工夫の一つとしてこれをご覧ください。黒のつぶしで主な墨の線を入れ、墨のにじみを灰色の線で細かく細かく刻んでいます。紙の繊維に墨がにじんでいる様子をこのように表現しているわけです。『謄写版』は長く続きましたが、次第に紙が手に入らなくなり、また工場の仕事が忙しすぎて廃刊

Meets TO-SHA



されました。若山八十氏の『孔版』は『謄写版』の仕事を受け継いだのだそうです。

小泉與吉の『謄写版』は関西で刊行されていましたが、全国に読者を持っていました。それで、各地の古本屋さんに行くと今でも手に入ることがあります。彼は創作版画を読者に勧めていますが、先ほども文字でご説明しましたように、謄写版の技術の普遍化と芸術版画の誕生と育成を目標とする雑誌でした。若山八十氏はその思いを受け継ぎ『孔版』を刊行しながら版画技法としての謄写版を考え、展覧会にも出品し

ていきます。当初は木版の雰囲気似ていて、木版の効果に近づきすぎている、それは謄写版として面白くないのではないかと木版画家たちからの反応が返ってきています。

ここにいろんな版画家からの言葉が残されています。川上澄生それから前川千帆<まえかわせんぱん>、川西英、平塚運一、恩地孝四郎、この人たちは版画家で主に木版画を手がけていました。中でも非常に厳しい意見を寄せたのは謄写版で仕事をしていた人で、板祐生<いたゆうせい>という鳥取の人です。この人の作品から、今ここにひとつだけ図版を挙げています。面白いのは板祐生の謄写版は、つぶし製版、つまりヤスリの目を均一に出して面を作ることと併せて、切り抜き、つまり伊勢型紙、染織などに使う型紙と同じように謄写版の原紙を扱い、切り抜いてそれを版にしています。原紙はそんなに強いのだろうか。試してみると、これはとても難しいです。貼り合わせて丈夫にするのですが、板祐生自身がよく嘆いていたように、ローラーで刷るときに破れやすいのです。

清水も『とうしゃ文化』という雑誌をつくりました。初めはおもに随想と技術紹介を書いていたものが、だんだんに版画雑誌になっていきました。当時清水があちこちの展覧会などに出していたのはこのような柔らかい雰囲気の版画です。ざらっとした、木版ではとても出せない柔らかさで、この少し曖昧な感じが独特です。

この効果を清水は貪欲に求めていきます。清水とも交流があった、彦根で「サンライズスタジオ」という謄写印刷工房を営んでいた、岩根豊秀の謄写版画です。やはりこの曖昧さや柔らかさは、以前の謄写版の作家たちは弱さとしてとらえていたものを、清水にしても岩根にしても、かけがえのないもの、そこから何か生まれる可能性のあるものとしてとらえていることが、この作品などを見ているとわかります。もうひとつご覧いただきましょう。これは星襄一、のちに木版画

に転じた版画家の作品です。

こうした作家たちの意欲が集まると展覧会になります。彼らは一生懸命呼びかけて実際に実現させた展覧会が例えば「孔版画展」です。ここに出して出品している作家の名前はちょっとご覧になってください。若山八十氏もそれから清水武次郎も、岩根豊秀も出品しているなかに洋画家が混じっています。難波田龍起<なんばだたつおき>、鶴岡政男などです。こんなに謄写版というのは魅力的な版式なのだから作ってみませんか、と版画家ではない人たちにも勧めていたのです。

そして、謄写版画を制作する人が増えてくるとスターが現れます。その一人が福井良之助です。厚木市で謄写印刷工房を営んでいた額賀保羅<ぬかがぼろう>の甥にあたり、額賀の仕事を手伝いながら作った版画だそうです。こうした版画が集められて一冊の孔版画集として発表されました。この孔版画集は、当時から人気がありましたが、今見ても全く色あせていません。

この版画集が認められて福井は版画家として活動を始めま

Meets TO-SHA



額賀保羅 福井良之助 青山学院初等部テキスト 1950年代

したが、謄写版の技術者としての仕事も少しご覧ください。私立の小学校のための英語の本です。この美しい本の内容は先生たちが練り、それを謄写版の技術者がこのような美しい形にまとめ上げています。文字の製版などは額賀保羅が、絵画の製版は福井良之助が手がけたそうです。

福井良之助の作品はこのようなどんどん洗練されていきます。残念ながら日本にあまりに残っていないのはアメリカの人が求めて帰国してしまったことが大きいそうです。このような作品もあります。1957年の制作です。この作品は59年

です。この頃、57年から東京国際版画ビエンナーレという、全世界から版画を集めて行う展覧会が始まりました。この福井良之助も招待されて出品しています。同じように若山八十氏も出品しました。ですから謄写版も国際的な広がりを見せていたわけなのですが、技術そのものは海外へ伝わることにはなかったようです。これが若山八十氏の海外での版画展への出品作です。

若山八十氏などと作品について議論したりする機会を持って清水武次郎などもこのような抽象的な試みを始めました。1980年には和歌山市で版画をやっている若い人たちに呼びかけて「和歌山版画 80年の会」を立ち上げ、画廊で毎年展覧会を開いて、若い人にも活躍の場を作っていました。けれども清水自身が彼らに謄写版をぜひやりましようとは言わなかったそうです。それぞれが自分のやりたいことを持つべきだという気持ちが強い人だったのだらうと思われま

す。このような謄写版の作品や資料を見てしまうと、紹介するしかなくなります。冒頭に申し上げたような当館の展覧会、この2月にはロンドンのウェストミンスター大学で発表し、日本の謄写版について熱く語ってまいりました。お聞きになった方々は、深く興味を持ってくださっていました。と言うのは、先ほど神崎さんの発表にも出ましたが、ヨーロッパやアメリカではタイプ製版が多く、それをゲストナーの輪転機で印刷するのが主で、日本の謄写版のように、製版も印刷も人間が手で行う仕事に驚いたそうです。

これはオルトガーブラというノルウェイのグループの仕事です。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の展示室での謄写版のインスタレーションです。このような新しい表現の手段として謄写版を選ぶ人たちもおります。そういった人たちとのつながりは私どもが何かを発信している限り、広がるものだと思います。面白いことになるかもしれません。それが今まで謄写版で仕事をしてきた人たち、謄写版を守ってきた人たち、または始めた人たちへの私たちができるレスポンス=返事だと思います。



Alt Går Bra at the V&A, 2019 © Alt Går Bra